

「総合型地域スポーツクラブ育成プラン 2013」インタビュー



総合型地域スポーツクラブの今後について語る松田氏。
理想を目指す熱い想いが感じられた

前号「JASAインフォメーション」(59ページ)にて既報のとおり、今年7月に「総合型地域スポーツクラブ育成プラン2013」が策定された。そこで、とりまとめの中心的な役割を果たした日本体育協会地域スポーツクラブ育成専門委員会委員の松田雅彦氏に、その理念や総合型地域スポーツクラブの今後のあり方について伺った。

「スポーツを核とした豊かな地域コミュニティの創造」を目指して

育成プラン策定 2つの理由

このたび、日本体育協会では「総合型地域スポーツクラブ育成プラン2013」(以下、育成プラン2013)を策定しました。なぜこのタイミングで策定したのかといえは、2つの理由があげられます。一つは「スポーツ宣言日本」「スポーツ基本法」「スポーツ基本計画」、そして「21世紀の国民スポーツ推進方策―スポーツ推進2013―」が出たことで、スポーツを取り巻く大きな流れが変わったこと。もう一つは、この10年間で総合型地域スポーツクラブ(以下、クラブまたは総合型SC)の数が増え、次のステップとして継続的にクラブが発展していくために、その質を問わなければいけないからです。

これまでは「総合型SCとは？」と問われると「多種目・多世代・多志向」という形態的な特徴をもっていると答えていました。一つのクラブに複数の種目を取り入れる「多種目」。さまざまな世代の人たちがスポーツを楽しむ「多世代」。そして複数の楽しみ方を準備するという「多志向」です。形態的特徴による説明は、簡潔でわかりやすいのですが、形を整えさえすれば総合型SCであるという誤解を生むこ

ともあったと思います。そこで「育成プラン2013」では、総合型SCを地域のなかにつくる意味をしっかりと位置づけようと考えました。

誰かが始めなければ動かない

基本理念には、「スポーツを核とした豊かな地域コミュニティの創造」を掲げました。総合型SCとは、スポーツがもつ「チカラ」を最大限に引き出す「しくみ」です。それは、スポーツがもっている「チカラ」、つまり「人と人、人と社会をつなぐ」機能を最大限に生かす「しくみ」をそれぞれの町につくり上げていこうという取り組みなんです。たとえば、面識のない人いきなり「仲良くしましょう」と言っても戸惑いますが、仮にその人と卓球をすることになれば、ボールを打ち合うことで、楽しみながら相手を知ることがができます。そして一対一がダブルスになり、団体戦になり、そこに子ども世代などが加わっていく。そのようにスポーツを楽しむことで、スポーツのもつ「つながる」機能を最大限に生かし、スポーツを核とした地域のコミュニティをつくり上げていきたいのです。

間違えてほしくないのは、地域をよくするためにスポーツを利用するのではないということ。地域住民がスポー

ツを楽しんで、楽しんで楽しんだ結果、知らないうちにスポーツ仲間ができた、という関係を目指すのです。

また、スポーツは体育の授業のよう



▶松田氏が顧問を務める総合型地域スポーツクラブ「しまもとパンブークラブ」では、「温かい人づくり まちづくり ふるさとづくり」を合言葉に活動続ける(写真は「たのしくフルダンス」教室の様子/写真提供:しまもとパンブークラブ)

に競技・種目内容(技術・戦術、ルール・マナーの学習)を楽しんでいると、きだけがスポーツではありません。スポーツをしたあとにみんなでシャワー

を浴びたり、クラブハウスで食事をしたりしながら、団らんの輪をつくる。ここまではスポーツライフだと考えます。ですから「豊かな地域コミュニティを創造する」ためには、スポーツをする場に加えて、その前後でみんなと一緒に話ができるサロンの必要だと考えています。いまの日本にサロンの場所を持ちあわせているクラブはほとんどないのが現状ですが、これからは体育・スポーツ施設にサロン機能は必須だと考えます。スポーツ文化の意味の理解とそれに伴う施設の整備——大きな計画ですが、誰かが始めなければ変わることではありません。これらは、総合型SCの質的向上を支える基盤づくりです。「育成プラン2013」をその第一歩にしたいと

考えています。

「新しい公共」へのミッションとビジョン

基本方針には、「活動のあり方」「クラブ組織のあり方」「活動財源の確保」を掲げました。それらは基本理念とどのようなつながっているのでしょうか。理念に沿って活動していくうえで、最も大事なことはみんながスポーツを楽しむ「しくみ」をつくることです。そこで大事な視点が「プレイヤー・ファースト」、つまり住民目線です。クラブは地域住民の方が何をしたいのかをヒアリングして、その意見を取り入れ、希望の競技・種目ができるように組織を編み直す。総合型SCでは競技・種目やチームにこだわらず、「スポーツ」という文化そのものをそれぞれの人が楽しむことを目指しています。ですから、組織によって決められた「しくみ」に住民が合わせるのではなく、住民の多様なニーズに対応できるように、組織が「しくみ」を変えていくというわけです。

もちろん、すべてのニーズに応えることができるわけではないでしょう。活動する場所がない、指導者がいない、財源が確保できないといった問題が出てくるからです。さまざまな課題がありますが、最も大事なことは「プレイヤーズ・ファースト」の視点から地域住民のみんながスポーツを楽しめる形が何であるかを、みんなで考えることなのです。

財源については、基本的に受益者負担です。つまり自分たちでお金を出したほうがわかりやすいし、動きも速くなります。ところが会員数が増えれば増えるほど組織的な運営をしなければいけませんので、事務局経費などが必要になります。単一競技・種目のチームだと規模も小さく事務経費も少ないでしょうが、クラブ組織になると今度は自分たちでさまざまな費用——コピー代や事務所使用料、郵送費などを負担しなければいけなくなります。その費用に関する理解を得られるかが非常に難しいところです。

しかしその意識を変える努力をし、経済的に自立していかなければ発展できません。すぐに変えられないのはわかってはいますし、行政などによる補助金があれば運営が安定することもわかってはいます。しかし、その補助金が途切れたら、活動そのものが終わってしまいうクラブではいけません。補助金はあくまでも新規事業を立ち上げるときなどの「補助」として活用し、本体の運営は自分たちのお金でやっていく。そういう経済的な自立が求められています。

また、経済的な「自立」とともに「自律」もクラブの発展には欠かせない要素です。運営に携わる人たちは、まず「何のためにクラブを町につくったのか」というミッションを十分に理解し、その方向性を確認しながら今後のビジョンを立てなければいけません。このミッションとビジョンの確立こそが自分たちをきちんと評価することにつながります。正しい評価をできることがすなわち「自律」であり、自律することと地域住民に認められ、経済的な自立にもつながっていくのではないのでしょうか。

総合型SCの育成にあたっては、今後それぞれの地域でクラブを動かす「人を育てる」ことが必要だと考えています。既存のクラブアドバイザー制度を質的にも量的にも拡充していくことが重要で、すでに活躍しているクラブマネジャーのスキルアップも目指さなければなりません。クラブ運営の考え方やノウハウを伝えることや「育成プラン2013」の理念を広めることで、総合型SC本来の考え方を多くの人々に知っていただきたいと考えています。

クラブが地域のなかで育っていくためには、地域住民の意識を変えることが大切になります。これを「社会イノベーション」といいます。しかし、地

域のなかでクラブが発展していくには、住民だけが頑張っても限界があります。行政による政策的な下支えが不可欠です。これを「政策イノベーション」といいます。これら2つのイノベーションがマッチする町になれば、クラブは必ず発展していくでしょう。これは日本体育協会だけでもできませんし、地域住民だけでもできません。地方自治体や文部科学省だけでもできません。すべての関係者が「日本をスポーツの楽しめる国にする」という意識のもとに協働することが大切です。

スポーツを楽しむことで、自分のこと、自分たちのこと、そしてみんなのことを考えられる人や町を育てていく、これこそが総合型SCづくりを通じた「新しい公共」(*)の実現なのだと考えています。

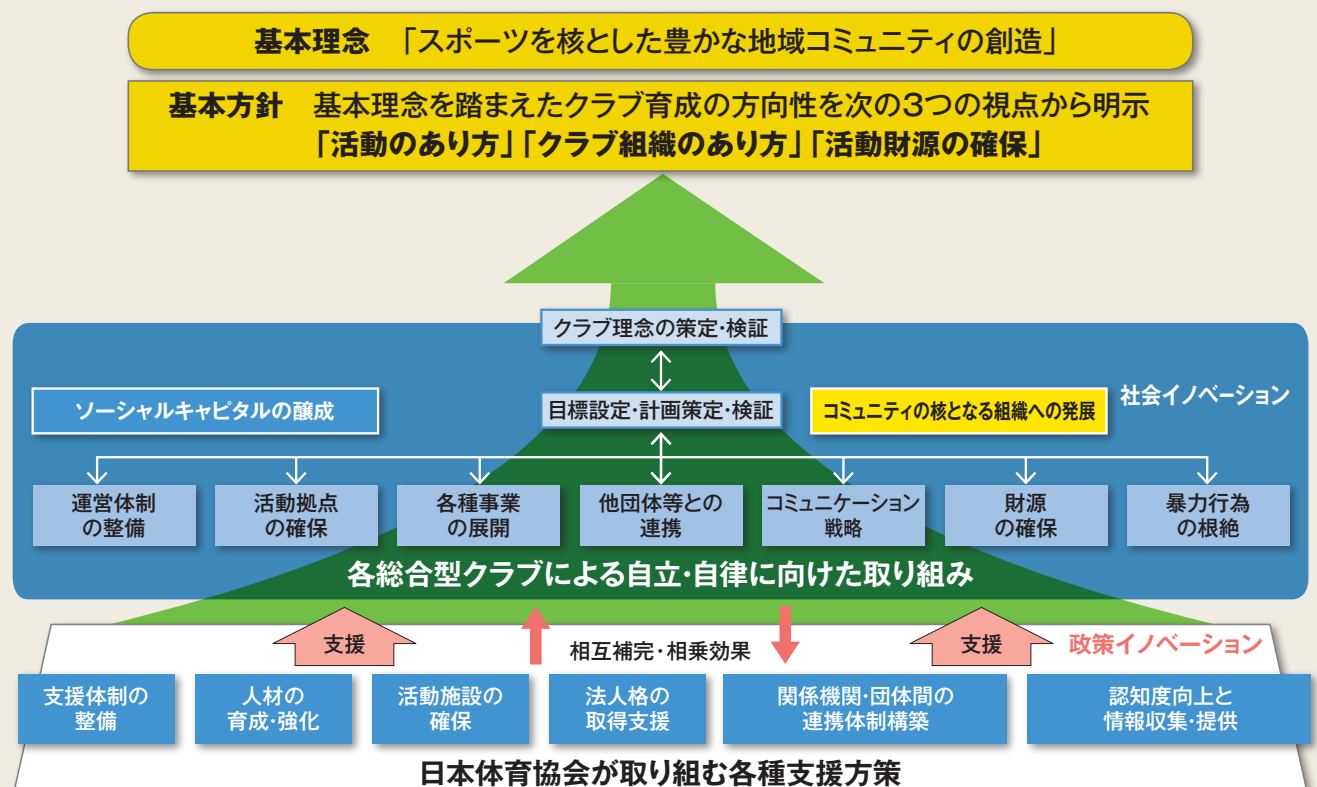
*1:「新しい公共」とは、「支えあいと活気のある社会」をつくるための、当事者たちの「協働の場」。「国民、市民団体や地域組織」「企業やその他の事業体」「政府」などが、一定のルールとそれぞれの役割をもって当事者として参加し、協働する。



まつだ・まさひこ

大阪教育大学附属高等学校平野校舎教諭。日本体育協会 地域スポーツクラブ育成専門委員会委員（中央企画班長）。総合型地域スポーツクラブ「しまもとパンブークラブ」顧問。

「育成プラン2013イメージ図」



準備段階から現在に至るまで、常に先頭に立って精力的に動き続ける高田会長は、設立当初のことをこう振り返る。

「南千住は600戸超のマンション群



▲▶小学生のミニバスケットボール教室とママさんバレーボール。大人も子ども大いに楽しんでいる

現場レポート



南千住スポーツクラブ(東京都)の場合

まずネットワークと人づくり 常に外へアンテナを広げて

2010年、東京都荒川区に発足した

南千住スポーツクラブ(以下、南千住SC)は、地元の学校や行政、さらには警察や消防、信用金庫まで巻き込んで、地域とうまく連携しているクラブの一つ。

南千住SCはなぜ地域に溶け込むことができたのか。
会長の高田忠則さんに伺った。



高田忠則会長

会』を発足させました」

地元の信用金庫に勤め、PTAの会長を務めた当時は、高田さんが広くて深い人脈を築く第一歩だった。PTAを離れてからも、地元の青少年委員や社会教育委員、区のパレーボール協会の副理事長も務め、子どもたちのトライアスロン大会の立ち上げにも尽力。そして2006年に区体育協会の理事長に就任すると、翌年「何か財産をつくろう」と、クラブ発足の取り組みが始まった。

クラブの創設には高田さんのネットワークがフル活用された。たとえばPTA人脈は会場として使用する学校との話し合いをスムーズにしたし、体育協会理事長としての立場は指導者の確保に役立った。

仲間づくりはクラブを成功させる最も大事なポイントだという。

「先に『総合型』をつくろうとすると、なかなか難しいと思います。まずは核となる人間をつくり、何が問題かを分析する。たとえば体育館など、会場の確保に苦労しそうだと思えば、学校とコネクションがある人を仲間に引っ張ってきます。そうした準備を整えてから総合型のクラブをつくるという順番が理想でしょう」

組織の中身はあと回しにしても、とにかく外に出ていって常に新鮮な情

報や新しい仲間を呼び込んでくる。高田さんの一貫したスタイルだ。

「現在、南千住SCのスポーツ教室は20ほどありますが、最初は5つくらいでスタートしました。そのなかの多くが自然発生的に生まれました。バトントワリングやヨガ、ミニバスケットボール、障がい者スポーツのボッチャなど、指導者たちはネットワークを通じて自ら手をあげてくれました」

信用金庫の掲示板を借りてクラブの情報を発信し、さまざまなイベントを開催してどんどん仲間を増やした。現在では会員が300人を超え、会場のキャパシティーなどから限界を迎えた会員数にまでなっているという。これからはより中身を充実させていくことがテーマである。

「健康目的のいいでしょうが、それだけでは長続きしません。必要なのは向上心。私たちは、人数が集まれば必ず大会に出ます。目標を設けることは会員増にもつながります。あとはトップアスリートによる指導をもっと充実させたい。一流選手から刺激をもらい、子どもたちにはより上を目指してほしいと思います」

地域によってクラブの事情は異なるだろう。しかし、常に外に目を向け、アンテナを張る南千住SCの姿勢は、一つの大きなヒントになりそうだ。